

超音波検査が有用であった右房進展を伴う腎細胞癌の一例

◎山本 麻由¹⁾、小島 光司¹⁾、福岡 秀人¹⁾、井上 美奈¹⁾、左右田 昌彦¹⁾、西村 直子¹⁾、高田 康信²⁾
JA 愛知厚生連 江南厚生病院 臨床検査室¹⁾、JA 愛知厚生連 江南厚生病院 内科²⁾

【はじめに】

腎細胞癌において下大静脈（IVC）腫瘍塞栓を伴う頻度は4～15%程度と比較的稀である．IVC 腫瘍塞栓発生例では肺塞栓等の重篤な症状を呈する場合もある為、早期の診断治療が重要である．今回、超音波検査（エコー）が病態把握に有用であった右房進展を伴う腎細胞癌の一例を経験したので報告する．

【症例】

患者は70歳代、女性．下腿浮腫及び肝機能異常の精査目的で当院紹介となり、心臓及び腹部エコーを施行した．

【血液検査所見】

TP 5.4g/dL, Alb 2.9g/dL, AST 56IU/L, ALT 82IU/L,
LD 459IU/L, ALP 424IU/L, γ -GT 121IU/L, ChE 123IU/L,
CK 176mg/dL, BNP 38.1pg/mL, Cre 0.99mg/dL,
eGFR 42.8, T-Chol 138mg/dL, CA19-9 46U/mL,
CA125 1758U/mL, SCC 1.7ng/mL

【心臓・腹部エコー】

心臓エコーにて右房及びIVCに腫瘍を認めた．右房腫瘍はIVCの腫瘍と連続性を有し、三尖弁嵌頓及び肺塞栓を示す所見は認めなかった．また、同時に施行した腹部エコーにて左腎腫瘍を認め、IVCの腫瘍との連続性が確認された．両検査より、右房腫瘍は左腎腫瘍由来であると考えられた．

【造影CT検査】

左腎からIVC及び右房に連続する腫瘍を認めた．

【経過】

臨床経過及び検査結果より右房進展をきたした腎細胞癌と診断され治療を開始した．

【まとめ】

右房進展を伴う腎細胞癌にて病態把握にエコーが有用であった症例を経験した．エコー技師間の迅速な情報共有により、心臓腫瘍と他臓器との関連性及び原因となる腫瘍の検索を行うことができた．領域にとられない検査情報の共有は質の高い検査提供に重要であると考えます．

連絡先：0587-51-3333 内線：1400